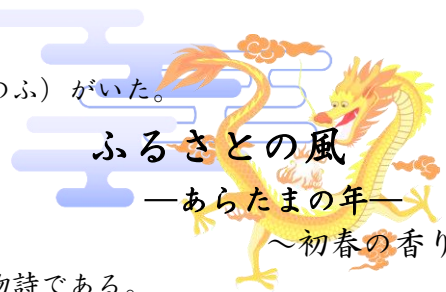


栄枯盛衰は世の常一。

平安時代末期、龍が天に駆け昇る勢いの如く、栄華を掴んだ武士（もののふ）がいた。



飛龍在天

千年の都、京都。

華麗な射手が腕を競う三十三間堂の「通し矢」は、新春を告げる京都の風物詩である。

三十三間堂は、平安末期、後白河法皇の勅願により平忠盛、清盛が建立した天台宗の寺院で、その規模は当時の平家の勢いを物語る。清盛はこの3年後、貴族として最高の位、太政大臣にまで上り詰めた。

朝廷や貴族の対立が混迷を深めた時代、貴族社会に大きな楔（くさび）を打ち込んだ平清盛は、我が国最初の「武者ノ世（武士の時代）」の到来を位置づけ、700年の礎を築いたのである。

平清盛の一門は、平家の中でも伊勢国に本拠を置く伊勢平氏主流の流れを汲み、伊勢との関わりは深い。伊勢平氏は伊勢守となった平維衡（これひら）から始まる。

「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響あり。娑羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす。
おごれる人も久しからず、唯春の夜の夢のごとし。…」

（平家物語 巻第一 祇園精舎）

平氏一門の盛衰を描いた平家物語。清盛の父、平忠盛が、三十六歳で初めて内裏の清涼殿「殿上の間」へ昇ることを許された、天承二年（1132年）から語り起こしている。

「忠盛御前の召に舞はれければ、人々拍子をかへて、「伊勢平氏はすがめなりけり」とぞ
はやされける。…」

（平家物語 巻第一 殿上閣討）

貴族たちは殿上人となった忠盛を妬み、失脚させようと数々の策略を練るが、彼がいかに機転を利かせて乗り越えたかが物語の中で語られていく。

外宮参道に「清盛楠」と呼ばれる樹齢800年以上の楠がある。平清盛は勅使として三度、神宮に参向しているが、その時この木の枝が冠に触り、怒った清盛が枝を伐り払わせたという逸話により名が付けられたという。

また「清盛堤」は、清盛がこの地域を水害から守るため、治承年間（1117～1181年）に築いたと伝えられる。堤を築くときに清盛の屯所に張られた幕張の松の位置を示す標柱が今も残っている。

「入道相国、一天四海を、たなごころのうちににぎり給ひしあひだ、世のそしりをもはばからず、
人の嘲をもかへりみず、不思議の事をのみし給へり。」

（平家物語 巻第一 祇王）

天下を掌中に握った清盛であるが、「驕る平家久しからず」の如く、自らの奢りによって、平家を滅亡へと導いていった。

「世の中に武者おこりて、西東北南、いくさならぬ所無し、うち続き人の死ぬる数聞く夥し、
まこととも覚えぬ程なり、こは何事の争ひぞや」

（聞書集）

同じ時代を生きた西行が、戦乱の世を嘆き、神宮の神威のもと、最も平穏な伊勢の地に庵を構えたのは、治承四年（1180年）、平清盛、福原遷都の頃である。

そして清盛の死は、ひとつの時代に幕を下ろすことになる。

伊勢市山里深い矢持町菖蒲は、平家の里とよばれる。平清盛の四男知盛が、平家の再興を願い、伊勢に隠れ住んだ「落人伝説」の地である。知盛山久昌寺は平知盛の菩提寺で、本堂裏の五輪の塔と、数多く並ぶ古碑は、知盛と平家一門の墓だといわれている。

元暦二年（1185年）、京の都を大地震が襲う。

その百日余り以前に壇の浦で滅亡した平家一門の棟梁、平清盛の怨霊が龍になって舞い降り、この惨禍を起こしたと人々が噂したと、慈円は愚管抄で書き残している。

三十三間堂の千体の観音像…、拝観後には無限の慈悲に包まれる。
闇に溶け込む黄金をまとう観音像たちには、必ず会いたい人と似た顔があるという。

喧噪のなかで耳をそばだてれば、平安の今様をうたう声が聞こえてくるかもしれない…。

◆ 新編日本古典文学全集 45 平家物語 巻第一～巻第六 （一古貞次/校注・訳 小学館 918/シ/45）

◆ 伊勢市史 第二巻 中世編 （伊勢市/編 伊勢市 L243/1/2）

図書館だより
2012年1月号より